

ボルネオ象救出作戦



特別寄稿

更家悠介*

Borneo Elephant Rescue Operation

Key Words : Conservation or Development, BCT

第1章 自然派サラヤとヤシ油

当社の創業者であり、私の父の更家章太は三重県熊野市の生まれです。幼い頃故郷の清流に親しんだ体験から環境保全への思いが強く、1970年代の石油系合成洗剤が主流の時代に、植物系洗剤のさきがけとなった「ヤシノミ洗剤」(写真1)を発売しました。当時はエコロジーなどという言葉もまだ一般的ではありませんでしたが、「自然派のサラヤ」という企業理念のもと、生分解性の良い商品や、環境負荷を抑えたモノづくりをこころがけていました。

そんな影響が私も幼い頃から環境に興味をもちました。私の本籍は熊野市ですが、幼い頃の原体験は



写真1

大阪市東住吉区の湯里にあります。昭和30年代当時は、市内でも田んぼが多く小鮎やザリガニ、トンボや蝶々などと、日のくれるまで遊んでいました。しかし開発の波は次々と押し寄せ、小川は洗剤の泡が立ち、宅地開発でいつしか親しんだ生物がいなくなっていました。1970年万博の年に、大阪大学の工学部醗酵工学科に入

学しましたが、生物を用いた排水処理を研究している市川教授のところで、勉強しようと思決めました。後にカリフォルニア大学に入学して、衛生工学を選択したのも、水の循環や排水処理に興味があったからです。

大学を終了して、サラヤ(株)に入社しましたが、サラヤは1952年の創業当時から、ヤシ油を主原料にした、手洗い用石けん液を開発し、販売していました。父である創業者と私は、人も本来自然の一部であり妥協せず品質を追求して行けば、それは自然と調和するものであることを信念として、商品開発を進めてきました。それは、創業以来の約半世紀の間、サラヤで買われている商品コンセプトであり、様々な商品の開発につながっています。

当社の商品は、手洗い石鹸から始まり、ヤシノミ洗剤やシャンプー、石鹸シリーズ・アラウ、洗濯用洗剤パウなど、ヤシ油を使った植物系の商品が多いのですが、その主原料は、ヤシ油(ココナッツ)やアブラヤシから採れるパーム油、パーム核油です。ヤシ油はよく海辺のリゾート地の写真に出てくるヤシの木になる実からとれる油で、商業的には主にフィリピンで生産されています(写真2)。しかしそ



写真2



* Yusuke SARAYA
1951年5月生
1974年大阪大学工学部醗酵工学科
1975年カリフォルニア大学パークレー校・工学部衛生工学修士課程
現在、サラヤ株式会社、代表取締役社長、衛生工学修士、衛生・環境
TEL 06-6705-3111
FAX 06-6700-6656
E-mail : sec@saraya.com



写真3

の生産量は年間200万トンと、パーム油に比べて極めて少量です。それに比べてアブラヤシ(写真3)は、もともとゴムの転換作物としてマレーシアで栽培が始まったのですが、大規模生産しなければ採算のとれない作物です。それがインドネ

シアにも広がり、今やその両国で世界のパーム油の総生産量3,300万トンの約85%(04/05)を作ることになりました(図1, 2)。これは大豆油の年間3,000万トンの生産を追い越して、世界最大量の生産を誇る植物油になっています。またパームの実の種子の中からも油が取れますが(パーム核油)ココナッツ油と組成がよく似ているので、ココナッツ油の代わりに使用することも多いのです。

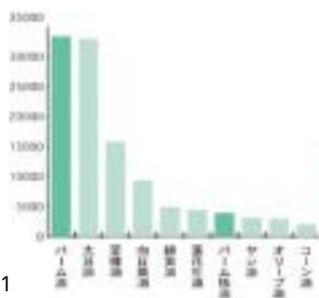


図1

図2



図1 世界の植物油生産量 2004年/2005年 (Oil World Annual)
図2 パーム油の生産量 2004年/2005年 (Oil World Annual)

このパーム油は、洗剤だけでなく、その他の工業用途、また主には食用に使われています(世界で90%が食用)。近年になり、中国やインドなどの成長を背景に需要が急増し、おかげでパームの生産も急増しています。また二酸化炭素の削減という観点から、バイオディーゼルなどの原料にもパームが使われるようになり、昨年、マレーシアでは年間70万トン、インドネシアでは40万トンの、バイオディーゼル生産プラントの建設が発表されました。このように需要が多いアブラヤシは、海岸沿いに生育するココヤシと違って内陸でも生育するので、熱帯雨林が大規模にどんどん伐採され、アブラヤシの大規

模なプランテーションに変わってきています。そのような中で、大資本による土地の買占め、労働力の確保に不法雇用、農薬の違法使用、動植物への影響、開発と保全の調和がとれない、など様々な問題がおこってくるようになりました。

第2章 ボルネオ象の救出活動

サラヤは今まで、高生分解度、植物系原料の使用、省資源の容器・包装などをすすめ、シンボル商品であるヤシノミ洗剤をはじめとして、エコロジー商品のリーディングカンパニーとしての役割を果たしています。しかし2004年夏に、原料生産地の環境問題について考えさせられる機会がありました。拡大するアブラヤシプランテーションが、今や文明的破壊力になり、野生の動植物の生息地を侵食している現状です。もはや、「パーム油 = 環境にやさしい・人にやさしい」と短絡的に語ることはできないことを、テレビのドキュメンタリー番組の取材を受けて、知りました。

きっかけは、「素敵な宇宙船地球号」というテレビ番組の中で、2004年8月放映分「自然にやさしい」の落とし穴...小象の涙」という番組の取材を受けたことでした。アブラヤシのプランテーションに棲息域を奪われたボルネオ象の窮状が紹介され、この番組制作に当って、「これを企業としてどう思うか?」と、経営者へのインタビューを受けました。この番組では、世界的なパーム油生産の拡大によってマレーシア・サバ地区の熱帯雨林が乱伐され、人里や農園に出没した象の群れの中の子象が罠にかかり、罠のロープが鼻や足に巻きついてとれなくなり、放っておけば命にも関わる子象を取材したものでした。一見すると元気なふつうの子象ですが、よく見



写真4

れば、子象がいかに危険な状態にあるかということ
を誰も認めざるを得ませんでした(写真4, 足
にロープが食い込んだ子象)。

ボルネオ象やオランウータンが住んでいるこの地
区の、熱帯雨林の乱伐の背景にあるのは、アブラヤ
シプランテーションの急激な拡大です。パーム油は
世界的に需要が増加の一途をたどっています。熱帯
雨林の減少は、野生動物の生息地を狭め、分断し、
やむなく人間と遭遇する機会を増やし、トラブルが
生じるようになりました。現地政府からいえば、パ
ーム油は重要な輸出商品、現地住民から言えば貴重
な現金収入の源、そして、大規模プランテーション
は投資を呼び込む対象です。これはものいわぬ野生
生物を無視すれば、いかにも魅力的な資本主義的構
図になっています。ボルネオ象達は、熱帯雨林の奥
で生活し、昔は人間と接触することはほとんどあり
ませんでした。しかし、アブラヤシのプランテーシ
ョンがどんどん開発され、生息域が狭められ、今や
このボルネオの固有種は絶滅の危機にあることが指
摘されています。私は、番組中で「パーム油を使用
している企業として、これをどう思うか?」と問わ
れて、自分の構想力が欠如していたことに気づきま
した。環境に優しいはずだった自社の洗剤が、一面
では環境破壊の一因となっている。これが運動をは
じめるきっかけとなりました。

ヤシノミ洗剤のせいで、象が苦しんでは困る。放
置すればブランドに傷がつく。わたしは、会社でチ
ームをつくり、調査員をボルネオに派遣して、いろ
いろと調査活動を始めました。調査活動をする中で、



写真5

いろいろなヒトや団
体とつながりができ
てきました。ことに
マレーシア・サバ州
の野生生物局(SWD)
が、積極的に協力し
てくれました。また
JICAから派遣されて
いた動物学者の坪内
博士も、パートナー
として大きな協力を
していただくように

なりました。2004年には、SWDに象の探索用トラ
ックを寄贈し、予算もつけて救出作戦を実施してい
ただきました。2005年1月には3週間の搜索の末、
罨が脚に食い込んだ小象1頭を保護し、治療したの
ち、再び森に返しました(写真5)。その後も、
SWD, WWF・Malaysiaであわせて4頭の子象を
救出・治療することができました。この活動は今後
も継続して支援していく予定です。

第3章 RSPO及びBBECへの加盟と活動

RSPOへの参画

しかし象の救出だけでは、根本的な解決にはなり
ません。2004年に持続可能なパームオイルのため
の円卓会議(RSPO)という国際的な非営利団体が
設立されており、2004年12月に、日本国内から最
初の団体として、加盟しました。同団体はゴールデ
ン・ホープやユナイテッドプランテーションなどの
農園を経営する会社から、ユニリーバ、ザ・ボディ
ショップ、などの流通・加工業者、ミグロスの一
般スーパー、またNPOなど、アブラヤシの生産か
ら販売までを広く網羅した、約70(現在は150)団
体が加盟している国際団体です。このRSPOではパ
ーム油が生産される環境に対して種々のガイドライ
ンをつくり、持続可能なパーム油の生産に向けて各
企業が協力、対応しようという目的で設立されたの
です。持続可能なパーム油の認証、生産環境、オイル
パーム園で働く人々の作業環境の改善、農薬等の
規制などの議論がなされ、2006年には、持続可能
なパーム油の生産のためのガイドラインが制定さ
れ、承認されています。

2005年の1月に、クアラルンプールで開催され
たRSPOの研究会に参加し、私は象の窮状を訴え、
参加者と共に解決案を議論しました。更に同11月
に開催された第2回総会において、野生動物の棲息
に重要な川沿い幅1 kmの地帯をパーム園の開発か
ら守り保全するよう、決議文の採択を提案しました。
そこはボルネオ象やオランウータン、テナグ猿など
貴重な野生生物の生息域であり、野生生物の保護の
ために必要だとされる最低限の保護区として、
SWDや坪内博士など専門家から提案されていた案
です。団体の根回しをして採択の可能性はあったの
ですが、プランテーションオーナーなどの猛反対が
あり、撤回せざるを得ませんでした(写真6)。



写真6

現地の産業や住民の生活にとって、アブラヤシはなくてはならない農業資源です。1 km四方の農園からあげられる収入は年間2,200万円に及ぶとも言われ、現地では大きな富の源になっています。増産に枠をはめるようなルールは急には受け入れにくかったため、あれだけRSPOの総会で反対が多かったと思います。しかしRSPOでは、パーム油関連の産業内で持続可能を議論しています。これはこれで前向きな成果ですが、私は、更に個々の産業を超えた視点、持続可能な目的をめざした産業連環、生産から消費までの連環(バリューチェーンと呼ぶ人もいます)について、今後の運動や啓蒙が必要と考えます。

BBECでの発表

ところでBBECはBorneo Biodiversity Ecosystem Conservationの略で、ボルネオの生態系の保全をはかる目的で、日本のODAとSWDが共同で取り組んでいるプロジェクトです。このBBECの会議が、2006年2月サバ州コタキナバルで開催されました。私もこれに参加させていただき、象の保護活動の講演をさせていただきました(写真7)。なぜ日本のメーカーがこんなことをいっているのだと、



写真7

奇異な目で見られていましたが、サバ州の川岸の熱帯雨林保護を提案すると、RSPOでの結果に反して、BBECでは、この保全提案は大いに好意をもって迎えられ、非常に素晴らしいと、賛同を得ることができました。これが、その後、ボルネオ保全トラストへの設立へと展開することになります。

第4章 緑の回廊プロジェクト・ ボルネオ保全トラスト設立へ

BBECから出発した「緑の回廊」計画

このBBECを機に、有志が集まり、「緑の回廊計画」が推進されました。これはサバ州の東海岸に位置するキナバタンガン川とセガマ川の流域を中心に、川沿いの緑地帯を回復・維持させ、オランウータンやボルネオ象など貴重な固有種の保護とパーム園の開発を調和させるプロジェクトです。いま同地域では、アブラヤシの農園の拡大によって野生動物の生息地は狭められ、分断化され、様々な問題を引き起こしています。SWDや坪内博士の研究、オランウータンの生態研究などによれば、川辺はもっとも生態系が豊かな場所で、川沿いの緑がつながっていることが大事であると指摘されています。行動半径が広い大型動物は、断片化された生息地で生命をつないでいくことができません。野生のオランウータンは7万ha以下、テングザルは2万ha以下の保護区では生息できないといわれています。生息地が狭いと、動物の遺伝子が均一化して生命力が弱くなる心配もあり、自然災害や新しい病気の発生によって絶滅する危険が大きくなります。キナバタンガン川やセガマ川の周辺にはいくつかの保護区がありますが、保護区と保護区を結ぶ緑の回廊があれば、動物たちは移動することができます。2万haの保護区は孤立していれば2万haにしかありませんが、別の3万haの保護区と回廊で結ぶことができれば動物たちにとって5万haの価値がでできます。

野生動物たちの大切な棲息地のキナバタンガン川やセガマ川流域でも、すでにアブラヤシのプランテーションが非常に勢いで侵食してきています。この計画の調査のため、2006年3月に、私は、サバ州司法長官を招き、キナバタンガン川の沿岸のプランテーションと熱帯雨林の状況を空から現地調査いたしました。空からは、川沿いからは想像できないほ



写真8

写真9

ど、侵食は起こっていました(写真8, 9)。さらにボルネオ保全トラスト設立準備会に当社の研究調査員が参加し、設立に向けての調整を行いました。

ボルネオ保全トラストの設立

2006年3月から数度会議を重ねながら、SWD、坪内博士、現地NGO・ウータンや、その他関係者に当社も参画し、BCT(ボルネオ保全トラスト)設立のための地道な準備が続きました。その結果、2006年10月16日、マレーシア、コタキナバル市のSWDの事務所内に拠点を置き、正式にマレーシア政府の認証を得て、ボルネオ保全トラスト(Borneo Conservation Trust)が設立され、活動がスタートいたしました。当面の計画では、サバ州のキナバタンガン川とセガマ川流域のアブラヤシ農園計6,200haを買収、地域の熱帯雨林を回復させ、動物たちが行き交う「緑の回廊」も復活させ、野生動物の楽園を取り戻すことです。買収には約60億円の費用が必要と言われ、国内外のパーム油関連企業のほか、広く消費者にも呼びかけ、寄付を募る考えです。日本においては、NPO法人ZERIジャパン(<http://zeri.jp/>)にBCT日本事務局を開設し、募金活動や広報活動を本年からスタートいたします。

第5章 これからの活動

恐縮ですが、傷ついた野生象の発見から始まったサラヤの環境保全事業は、取り組んで2年ばかりにもかかわらず、独自の取り組みが評価され、2006年にいくつかの賞をいただきました。

2006.3.28 第4回日本経営大賞環境プロジェクト賞
(三重県主催)

受賞の理由としてはパームオイルを原料として用いる同社が、大企業に先駆けて、資金面だけでなく実際に社員を派遣してマレーシア政府に協力をして現地で汗を流している。RSPOに日本で初めて参加している点も先駆的である。同プロジェクトは、パームオイル問題の象徴的取組であり、まだ緒に就いたばかりではあるが、同社が率先しているこの取組が関係者に拡大しつつあり、パームオイルの生産から流通、消費に至るまでの一連のマネジメントシステムの構築など、今後の展開が大きく期待できる。

2006.10.26 第3回朝日企業市民賞(朝日新聞社主催)
マレーシアでの象の保護活動と熱帯雨林保全の取組みに対して、企業の社会貢献活動が評価された。賞金の100万円はBCTに寄付しました。

2006.12.17 大阪市環境表彰

環境にやさしい無添加石鹸やヤシノミ洗剤などの環境配慮型商品の開発を創業時から一貫して続けてきた。また、「自然と共存できる企業」を目指し、製品の原料となるマレーシアのパームヤシのプランテーション拡大により被害をうけている熱帯雨林やその生息動物の保護など、環境保全活動に現地政府やNPO・諸団体との連携を図りながら積極的な取り組みを行っている。

これらの受賞は、たいへん有難いことで、これを励みに、実際に「緑の回廊」が実現されるように、微力ながら貢献をつづけます。そのためには会社も強くなり、余裕のある中で、社会貢献活動も行わないといけません。ゆえ、経営者へのプレッシャーは多いと思います。また社員、そしてビジネス関係先にももっと運動を理解していただく必要もあります。また、その先にいる消費者の皆様と、「地球環境はみんなつながっている」、「すべてが共生している中で、生かし生かされている」という思いを共有し、地球環境の改善に取り組み、次世代にすばらしい地球を残したいと思っています。